

改めて、皆様、ご卒業、おめでとう、ございます。*)

本日、皆様にとっても、そして我々教員にとっても記念すべき、平成18年3月17日午後の「学位記」授与式でのA類学校教育主任としての挨拶ではなく、新たなChallengeへのお祝いと、願いを、少し、時間をいただいて、お話しします。

ところで、今日の午後、研究室に専攻代表の松崎さんが、研究室に訪ねてきて、「今晚の謝恩会には、ご欠席の通知をいただきましたので、……」とのこと……。「えっ???!!!!…出席に丸を付けましたが…」「いえ、先生、『欠席』に丸が付いていました。間違いありません……」とのこと……。「ウーン!…出席に丸を付したと思っていたのですが……。いえ、今日は出席させていただきます……。必ず……。大事な祝いとお礼を申し上げ、お渡ししなければならないものもありますから……。会の途中で、私に、ちょっと、振ってください……。」

そして、……午後5時半前には、やはり2名の卒業生が研究室に尋ねてきて、しかも、お花を持って……『欠席』とうかがったものですから、と……。

.....
.....

いま、私は、体の右の腰痛、右の肩痛、そして、右の目の痙攣……と、体の『右』にすべての病状が現れています……。これは、私の『左』の脳に障害があることを示しています……。そう、論理的に、コトを進めることができないということですね。言い換えれば、左の脳は、まだ、大丈夫（と思っていますが……）、そう、「感性」の部分は、まだ、やや健在……ということです。こうした病状のなせるワザ（?）、でしょうか……。今日この機会を得て、皆様と、ある喜びを分かち合うことができますが、同時に、こうした「ヤマイ」がありますから……。バンコクにいたとき以上に、皆様の「支え」が、必要なようです……。

これから、すこし、論理のお話をしようと思いますが、もし、意味不明と思われることがあれば、それは、上記のような致命的な病気(?)によるものですので、お許しくださいね。

さて、「質」が問われていることは、今日の午後にお話しました。

A類学校教育(教育学)教室では、さまざまな活動の「質」を高める一つとして、今年度、平成17年度から、「卒業研究グランプリ」を創設することにいたしました。

もちろん、制作された結果としての「論文」と「発表会」での発表の内容、態度などのみに与えられる賞ではありません。その制作の過程、つまり、4年生になって早々に教室構成員の先生方の研究室で実質的に卒業研究を始めた時点からの、研究への絶え間ない取り組み

み、態度、意欲も評価の対象としております。そのため、「論文賞」とはせずに、最終的には、「卒業研究グランプリ」といたしました。したがって、もちろん、我々教員側の指導力、つまり、指導の「質」、も問われることとなります・・・ですね?・・・ご臨席の先生方・・・。

この賞を育てるのは、あなた方です、そして、我々教員です。

今は、今日この時までには、この賞の名称をご存知だったのは、第二次審査にあられた平野先生、腰越先生、そして、古屋先生、そして、私の4名です。

ちなみに第一次審査では、教育学教室を構成する全10名の先生方が、ご討議、ご協議されました。これ以前、平成17年12月21日に開催された「教室会議」では、論文賞、論文大賞、・・・などなどご意見がありました。そして、最終的には、この時点で、教室のホームページに、山田先生のご尽力で掲載されているように、「第一回教育学教室卒論大賞」でした。・・・

余談ですが、・・・ホームページには、名称が、変わることを見越していたのでしょうか、黒色の背景にほぼ同じ色で記述されており、ドラッグしてハイライトしなければ、読めないように「工夫」されています。・・・「感謝」です、・・・山田先生・・・ありがとうございます。

ともあれ、こうした賞は、教室では初めてのことで、あえて **challengeable** といいたしましょう・・・、はじめての試みですから、構成員の先生方が、真剣に議論し、その創設に向けて、協力を惜しみませんでした。

そして、その結果として、賞の名称を「卒業研究グランプリ」と決定いたしました。

何事にも、最初があります。それを **ESD** の **S** ではありませんが、**Sustainable** ですね、持続的に発展させ、日本の、そして、世界の、教育界で認知させていく努力と責任が、我々には求められます。

こうした **challengeable** な賞の創設を言い出した者、言い出しっぺ、としまして、皆様に、いっそうの「ご支援」とご協力を、お願いする次第です。

さて、選考経過と選考基準などを、少し、お話ししましょう。

1. 選考経過

- (1) 平成18年2月10日(金) 卒業論文発表会及び審査会(各分科会1名の候補者推薦、協議)

- (ア) 第1分科会「教育哲学・教育史」(6件)
- (イ) 第2分科会「教育制度・教育方法」(6件)
- (ウ) 第3分科会「教育社会学」(5件)・・・

計17件が、対象となりました。

- (2) 平成18年2月16日(木) 第二回審査会(協議、各分科から推薦された各1名の候補者計3名を、「第1回東京学芸大学教育学部学校教育(教育学)卒業研究グランプリ」受賞者とする)

審査委員：篠原文陽児(委員長)、平野朝久、腰越滋、古屋恵太

2. 審査基準概要

各分科会からの候補者各1名につき、

- (1) 平成17年度卒業研究の遂行過程
- (2) 平成17年度卒業論文
- (3) 平成17年度発表

の3者を総合的に判断し評価する。

- (4) 受賞者はホームページ、掲示によって広報し、謝恩会等において賞状を授与する。

なお、卒業研究論文発表会は、大別して3分科会とするものの、分科会の数は発表者数の調整などに依存する。そのため、その構成領域と候補者数は確定されたものではない。

3. 備考

- (1) 学校教育(教育心理学)教室での経験を配慮し、副賞は授与しない。賞状の授与は、平成17年度謝恩会(平成18年3月17日予定・・・今日、この場ですね)で行う。
- (2) 各分科会での参加者(教員、学生)はそれぞれの分科会での発表者の論文及び発表の様子を熟知している。
- (3) 領域間で評価の観点を統一することは、現状では困難である。

.....

- ・できるだけ、論理的に、と思ったものですから.....やや長くなりましたが.....。まだ、やれば、できる、ですね。「ヤマイ」は改善してきているようです

大分、前置きが、長くなりましたね。

.....

.....

さて、17名のそれぞれの論文等には、それぞれ優れた点がありましたが、.....

第1回(平成17年度)学校教育(教育学)教室「卒業研究グランプリ」優秀賞を、

新垣 博也 君、力石 みのり さん、松村 あゆみ さん

の3名に、授与します。

では、新垣君、前に出てください。……

おめでとう！

<<<賞状を読む>>>

・ ・ ・ ・ ・

力石さん、……

おめでとう！

<<<賞状を読む・名前まで。以下、同文、とする>>>

そして、松村さん……。

おめでとう！

<<<賞状を読む・名前まで。以下、同文、とする>>>

最後に、どんな点が、優れていたか、ほんの少し、ご紹介します。

平成17年度学校教育（教育学）教室「卒業研究グランプリ」
優秀賞にかかる論文概要

新垣論文……「『他者』の観点による教育関係の見直し—教育における『主体』の再構築に向けて——」は、子どもの「主体性」という、教育学では古典的とさえ言い得るテーマに、ポストコロニアリズム等の現代思想において、また、現代教育哲学において注目されている「他者」概念を通してアプローチした意欲作です。教育史・教育哲学領域では、次の点において新垣論文は、卓越性を有していると判断されました……。丁寧な資料収集等の作業経過と、加えて、論文作成の過程においても、毎週指導教員のもとを訪れるなどコミュニケーションを大切に、常に誠実で真摯な態度で指導を受け、論文の完成度を高める努力をされましたことも、高く評価できます。

力石論文……「社会の変化にみる『教育を受容しない子ども』の実態～『教師-子ども』間に生じる授業への意識の隔たり～」では、テーマにかかる実態把握と、その原因を社会的背景に探り、その原因に対してどのように向き合っていくかを考える、授業成立の条件、社会の変化による「教師-子ども」関係の変化、授業に見られる「教師-子ども」間の「ズレ」について明らかにし、今後教育改革を行う際の基礎となることについての提言がなさ

れています。研究の過程では、授業観察を行うと共に文献と資料を丹念に読み込み、適切に使って、より広い視野から追究し、哲学的な深い考察を行っています。また、絶えず、自分の考えを厳しく問い直し、指導教員はもとより関係する教員にもしばしば助言を求めると、研究に対する真摯な姿勢が見られました。その結果、論旨も明快で、首尾一貫した、優れた論文となっています。

そして、

松村論文……「少年犯罪報道から読み解く『メディア・リテラシーの必要性』」は、少年犯罪をテーマに、その報道のなされ方に注目し、日々の情報を我々が鵜呑みにする態度の危険性に警鐘を発し、どのように情報を受け止めればよいのか、その態度のあり方を巡って、情報を読み解き発信する力という意味でのメディア・リテラシーの必要性とその可能性について、社会学的に実証的に扱っている、優れた論文構成です。ホリエモン騒動、メール問題がたびたびマスメディアで取り上げられている今、とてもタイムリーな目を見張る論文であり、発表と制作過程についても、真摯な態度と努力が認められました。

最後に、本賞「卒業研究グランプリ」創設の趣旨にご賛同いただき、審査に当たってこられた教育学教室のすべての先生方、なかでも、特に、平野先生、腰越先生、古屋先生には、第2次審査まで、ご苦勞をおかけいたしました。「感謝」……です。

改めて、この賞を育てるのは、皆様ですし、我々教員、そして、皆様の後輩である学校教育教室の在学生、またこれから入学してくる新入生です。

今後、いっそうのご支援とご協力をお願いして、お祝いのご挨拶といたします。

以上

(*) 本稿は、平成18年3月17日夕刻に開かれた、平成17年度東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程学校教育選修「謝恩会」における「第1回(平成17年度)東京学芸大学教育学部学校教育(教育学)卒業研究グランプリ」表彰式のための筆者による「祝辞」の再録である